

令和5年度 第2回甲賀市総合教育会議 議事録

1. 開催日時 令和6年3月8日（金）
開会 15時30分
閉会 17時00分
2. 開催場所 甲賀市役所4階 教育委員会室
3. 議題 (1) こどもの居場所づくり
(2) 甲賀市版学力調査
4. 出席委員 岩永裕貴市長、立岡秀寿教育長、野口喜代美教育長職務代理者、
松山顕子委員、藤田浩二委員、池田吉希委員
5. 事務局員 (1) 教育委員会事務局
教育部長、教育委員会事務局次長（総務・管理担当）、
同次長（学校教育担当）教育総務課長、学校教育課長、同課長補佐
(2) 総合政策部
総合政策部長、市長公室長、総合政策部次長、同次長（ICT推進担当）、
政策推進課長、同課長補佐、同係長
6. 傍聴者 なし
7. 議事内容 別紙参照

●事務局

令和５年度第２回甲賀市総合教育会議を開会する。本日の総合教育会議は「甲賀市総合教育会議設置要綱」第七条に基づき一部非公開とする。本日の傍聴はなし。それではまず始めに、甲賀市市民憲章を唱和するので、皆様、ご起立をお願いする。

【全員起立し甲賀市市民憲章唱和】

●事務局

それでは、会議開会に当たり、本会議の議長でもある甲賀市長岩永裕貴がご挨拶を申し上げます。

●岩永市長（開会あいさつ）

委員のみなさまには、本日はご多用にも関わらず令和５年度第２回甲賀市総合教育会議にご参集いただいたことに感謝を申し上げます。

また、日頃から、教育分野に限らず、多岐にわたる視点から本市行政の推進にご理解、ご協力をいただいていることについて重ねてお礼申し上げます。

「能登半島地震」の発生から早二ヶ月が経った。お亡くなりになった方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。

当初想定していたよりも大変大きな被害が確認をされている中で、本市からも被災地に向けて職員を派遣し、様々な支援に取り組んでいるところ。引き続き、長期的な復旧・復興が必要になると想定されることから、様々な要請には、積極的に市としても今後取り組んでいきたいと考えている。

２月２３日には、「３０歳のつどい」を開催した。同郷の同世代とのつながりを持ち、ふるさとについて考える機会を創出することを目的に、今年度３０歳を迎える市職員が中心となって企画を行ったものであり、県内初の取り組みとなる。

当日は１００名を超えるたくさんの参加があり、「同じ場所、同じ時代を生きてきたからこそ理解し合える同い年のきずな、肩書きや立場にとらわれない関係を生涯の宝にしてほしい」とお伝えさせていただいた。ＳＮＳの普及により、直接会わなくても何をしているかわかるようになった今だからこそ、希薄になった同世代とのつながりを構築することが一層重要となっており、そのことによりＵＩＪターンや地域づくりの担い手育成、移住定住の促進や関係人口の増加につながっていくものと期待している。

しかし、「住みたい、住み続けたい」と思っていたための全ての出発点は教育にあり、こども達が、安心して、自分の力を伸ばしていけるような環境を私たち大人は作っていかなければならない。

来年度には、教育委員会の学校教育課内に「学びの多様化推進室」を新たに設置し、学校との連

携強化を図るとともに、市内小学校には「スペシャルサポートルーム（以下、SSR）」を立ち上げるなど、誰一人取り残されない学びの場を充実させたいと考えているところ。

本日の総合教育会議では、「こどもの居場所づくり」と「甲賀市版学力テスト」について、事務局から説明・報告を受けた後、委員のみなさま方と議論を深めていきたい。

委員のみなさま方におかれては、忌憚のないご意見、活発なご議論をお願いしたい。

【事務局：議題１「こどもの居場所づくり」について資料説明】

●岩永市長

説明の通り、こどもを取り巻く環境は年々厳しさを増してきているという認識で、不登校や引きこもりなど多様な生きづらさを抱えるこどもは、全国的に増加し、甲賀市においても例外ではない。様々なニーズ、また特性を持つこどもが身近な地域においてそれぞれのライフステージに応じた居場所を切れ目なく持っていくということは大変重要であり、すべてのこどもが安心安全に過ごせる居場所づくりを甲賀市も積極的に作っている状況である。これまで以上に教育委員会、市長部局連携が必要になり、部局横断の取り組みにより、仕組みづくりを進めてまいりたい、さらに充実をさせて参りたいというふうに考えている。ここからご意見をいただくが、なぜ、こどもや若者がそういった孤立・孤独・引きこもりが増加している点で、お気づきの点を聞かせていただきたい。どのようなビジョンや支援策・視点が大事なのかについて忌憚なきご意見をいただきたい。

●野口教育長職務代理者

本当にこの指針が出て、目からウロコである。最初に取り組みへの感想、指針に対する感想を話し、その後で質問させていただきたい。

私は去年の４月から、ハンドベル、音楽でつながりましょうという取り組みを甲賀市でやってきた。７月に説明会を行ったが、集まったのは５、６人でどうしようかと思ったが、いろいろ音楽仲間や友達と９月に１２、３名揃えた。毎月一回実施しており、内容はハンドベルだけではなく、一時間はハンドベル、あとの時間はそれぞれの生活や思っていること、家族のことをみんなで話をする。最初はどうかと思ったが、仲間は障がいを持っている人もいるし、それから家族がいる方もいるし、障がいとまではいかないが心の中で悩んでいる方、年配の方も、外国人の方もそれぞれが取り組んできた。ハンドベルの音色のこともあるが、３０代、４０代のこれまで繋がらなかった人が繋がる居場所だと思えた。一年が経って、明後日に発表会を行う。来年度もやるか聞くと、みんながやりたいと言っている。

この指針を読んで、居場所って本当に大事だと私も実践を通して思う。特に場所の問題。以前は場所に固執していたが、場所の問題じゃない。これまでの経験から、時間的なこと、人間関係のこと、これが大事だということを意識しなければいけないと思った。居場所がなかったらどうな

るか、それは孤立であり、孤独である。こどもたちがこれから生きていく上で本当に居場所というものがなくてはならないということを指針は教えてくれた。事務局から説明があった資料の中で市の素案も見させてもらったが、一番大事なことは理念である。政府も書いているが、安心安全でいられる場所がまず大事である。これからの社会を生き抜いていく上で、どんな力が必要なのかと考えた中で居場所では体験など様々な学びがないといけない中で、若い人たちに自己肯定感、自己有用感が必要である。つまり、ウェルビーイングだが、身体的にも精神的にも社会的にもずっと一生幸せでなければならない。私が一緒に作らせてもらった中でも若い人たちがいろいろ意見を言ってくれる。そのような主体性が居場所にはないといけないということをこの指針や市の取り組み、素案から考えさせていただいた。原則、理念、改めて理解や関心を深めるだけで終わったら何もならないので、一緒に何をやるか、行動に移すことを共通認識がいると思う。後ほど、市民団体の方の声とか、様々な思いをお話させていただく。

次に質問をさせていただくが、何のために、何を大切にするためにこの SSR ができたのか教えてほしい。

●事務局

今まで教員が不登校傾向のこどもに寄り添っていたが、さらにこどもと接して話しやすい環境を作っていこうと、こどもたちに寄り添い、話し相手となる場所として SSR を小学校の中に作っていく。主には大学生、教員の OB で、スクーリングケアサポーターを構成し、教員とは別に配置する。教室に入りづらい、学習だけでなく様々な悩みがあるこどもの声を聞いて、スクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラー、臨床心理士、社会福祉士の方たちに繋げて、それぞれ個々に応じた学習環境をサポートする事業で、令和 6 年度から始めていく。十年近く前から東京の方では始められており、効果が出ている。甲賀市教育委員会として効果、成果が出るように取り組んでいく。不登校は最大の課題になっており、小学校中学合わせて多くの不登校児童生徒がいるという状況を食い止め、減らしていきたい。

●野口教育長職務代理者

学校というのは、教育の時間だけではなくて、居場所であるという位置づけの部分から、担任だけではなく、生徒指導の担当者、それから支援員、スクーリングケアサポーターの中でどんなふうにしてやっていくかという運営も含めて立案がされる。学校外の人材を使うのは大事で、大学生のサポーターとか、企業から野菜作りなど様々な支援を得ている中でのポイントは先生の考えだと思う。年度当初に先生全員が SSR に来られるようプランニングをする。こどもたちが担任の先生だけではなく、他の教科外の先生に会う。一律的に授業をするのではなく、一人一人が様々な形で会話をする。その過程でこどもたちの気持ちがちょっとずつ和らいでいくということを大事にされている。先生の中に多いのは、一般の教室ありきで、教室中心であり、教室へ来られない、例えば特別な支援が必要なこどもたちは不平等であるとか努力が足りないとかいう意見が多いと書いてある。甲賀市ではないと思うが、学校生活の中で居場所づくりのポイントが先生たち

の考え、思いが一番大事であることを今伺ったので期待している。

●立岡教育長

スクーリングケアサポーターという名前は昔、元々はメンタルフレンドという言葉であった。甲賀市の現状として別室に自分の居場所を見つけようとしているこどもがいても、余剰を取っていないので教員がそこへずっとついていられない。空いた先生が順番に代わって入っていくかたちをとっていたのが、SSR を居場所とするこどもたちに指導・支援ができるスクーリングケアサポーターを常に配置しているという点が大きい。ただし、運営の全体を一人に任せるわけではなくて、学校全体の思い、計画の中で進んでいくその最前線にいるのは、スクーリングケアサポーターであり、その後ろにはスクールカウンセラーもスクールソーシャルワーカーも、生徒指導、不登校担当も含めて組織として対応していくという構図になっている。

●松山委員

教育委員会で毎月いろいろな問題を聞かせていただくが、家族、家族の中での居場所がない、家の中で孤独なのか、学校の中で孤独なのか、学校で先生とうまくいってない、友達とうまくいってない、様々なところで孤独を感じていることが様々な種類の問題につながってきているだろうと思う。まず孤独にしないということが大切。居場所を提供できる方法はあるが、先ほど資料の説明の中に、市民団体の活動が先行しているとあったが、本気度の高い市民の方がやってくださっているのかなと思う。本気になってやることが大事だと思うが、来年度から SSR を設置するのは教育委員会として本気度が出ているのかなと思う。その部屋に行けば必ず常駐している人がいる、各学校にいるということで、教育委員会が本気に対応してくださる、期待したいと思う。居場所のないこどもたちをサポートするために、先ほど福祉部門と教育部門の連携が重要とあったが、福祉的な観点から、孤独になっているこどもを愛情で包んで安心感を与えた上で教育をしないといけない。小さいこどもに関しては、教育委員会や市がカバーしていく面もあると思う。昨今、新聞でよく出てくる事件、問題では、市や教育委員会のサポートが外れてしまった人たちが孤独になり、正しいところに繋がらず、間違った方向に頼っていつてしまう。孤独を埋めるために頼ってはいけないところに頼ってしまい、事件につながったり犯罪に巻き込まれたりということになっていくと思うので、こどもの間にいわゆる正しいところにつながっていったという経験があること、そして正しいところに頼れるラインがあるのだ、守ってもらえるのだということを知っておくのが大事かなと思う。

●藤田委員

私も子育ての事業所に携わっておりまして。児童クラブ放課後の児童クラブとか、放課後とデイサービスの中で、安心できる居心地の良さの中から、こどもたちが安心して周りを見て、周りの刺激を受けて育っていくというのが実感としてある。

保育園で言えば、「僕、味噌汁嫌いです。食べたこと今までありません」と宣言した子が、お昼の時に味噌汁と大根が出てきたときに「この大根うまいな」と周りの人が食べていたら「ホンマか

な」とちょっと食べてみる。食べたら美味しかった。お迎えに来たお母さんに「僕、生まれて初めて味噌汁を食べた」と報告して「頑張ったね」とお母さんが返される。そのようなやり取りを見ていると、おじさんが睨んで「コラ、食わんか」という支援の仕方ではなく、周りの刺激、子ども同士でやり取りをしながら育つことがある。

児童クラブでは最近1、2年生はちょっと冷めたと言うことがある。ジャンケンをして、勝った子が「やったー！」って言ったら、「そうやって煽るから、負けた子が泣いている」と負けた子のことを言うと、勝ったことが悪かったのかと思って、勝った子が泣きそうになってしまう。ただ、その時に上級生の3～6年生が「勝つこともある。負けることもある。経験することが大事なんや、ほんで見てみ。サッカーでゴールした時、めっちゃ喜ぶやろう、嬉しそうに。それは頑張っていたからで、自分も今度頑張ったら勝てる。まあジャンケンは運の世界やけど」そういうフォローを子どもの中でやると自然と身につけていくのではないかな。

登校の様子を見ているが、信号赤になって車が止まっている車の前をわたるとき、高学年の子が「ありがとうございました。」と、運転手さんに頭を下げる。低学年の子は繰り返す中で頭を下げ、声に出して挨拶できていくので、やんわりと子ども同士の育つ世界を作っていってあげたいと思う。SSRのこどもはここ行ったらゆっくり楽しめる場所は、必要だと思う。地域の自治振興会の子育てに関わる事業をし、こどもは楽しみにしている。昔からの行事も同じだが、新しいハロウィンイベントも期待して来る。大きい子の卒業祝パーティーをするが、大きい子がクレープを焼いて飾り付けして食べる面倒をみると言い、だんだんと面倒を見てもらった子が大きくなって、小さい子をみてあげるというような人の優しさが持てる大人になっていくと思う。児童クラブにしても放課後デイサービスにしても、甲賀市は全面的に協力、バックアップしてくださるのはありがたい。ちょっとしたことで子どもたちは育っていくことを実感している。

●池田委員

あえて違和感のある部分を話させていただく。今の居場所づくりは障がいがある方とか引きこもりの方とかははっきりと特徴のあるものについての対応が多い。つまり、居場所づくりというのが問題を解決する方に視点がいつていることに違和感がある。家で言うと、居場所というのはリビングルームである。リビングルームにいられない子をどうするか、という話ばかりで、リビングルームをどうしたらそこから出なくて済むのかという話がメインになってない。目的がはっきりしていないものでいうと、例えば部活の支援や自然体験関係の国の指針を見ると、こどもの居場所づくりが目的のものと、もともとは別の目的で行われていたものが結果として居場所となるというものがあると書いてある。ここがベースで大事だと思う。

視点としては、数の多いところから、こぼれるというか、言葉を選ぶが、その部分をどう補うかも大事なことだが、ベースになる日頃の活動の中で直接に「ここが居場所だよ」というのではなくて、結果として「ここが居場所になっている」というところに、力を注いでいかないと長期的に見て予防で改善していくことにつながりにくいと感じた。

市民活動が先行し突破した部分はあると思うが、例えば、こどもの進学先を選ぶときに学力プラス部活、学風を重視するという親の視点がある。そういうところでこどもが学ぶことを分かっているのも、そこが大事になる。居場所があるかを考えて、進学先を選ぶという視点で言うと、本当に普通の学校とか部活というところにも力が必要ではないかと思う。

●岩永市長

大変大切なお指摘だと思う。今皆さんのご意見を聞いているとやはり大体が居場所というのは安心安全でなければならないということで、予算編成の中で、場所を運営して行く箱と人に対する予算をつけたが、SSRはそれぞれの学校でソフトを自ら作り上げていかないといけない。場所はあるが、凄く特殊な場所になってしまわないか、こどもたちにとって学校の中にあるが、心の距離がより開いてしまう場所になっていかないか。もしかすると、市からSSRをそれぞれ作ってくださいという指示を受けて、やれと言われたのでやるという話だったら、本当に限られたこどもたちの特殊な場所になってしまう。今、池田委員がおっしゃったような心配が現実のものとならないか。A小学校だったら、A小学校のSSRってどんなものかというのをこどもも先生も一緒に1から考え、居場所づくりというのをしっかりしていかないと、みんなで理解して、どういう場所だということを育てていかないと。最初は多少時間がかかってもいいと思う。そういった取り組みは重要だと思うが、認識、スタートアップの切り方、考え方があれば、ぜひ、何かアイディアを披露していただきたい。

●事務局

過年度は過去から学校も教師もこどももそういう空間を非常に求めていた。ただ教育長がおっしゃったように担う職員がいなかったことが最大の課題であった。今回SSRによって、こどもたちの目線に一番近い、こどもとしゃべりやすい、関わりやすいスクーリングケアサポーターという入り口が教師にこどもの状況を伝えながら、学校全体としてその子の対応を進めていく取り組みを求めているところである。

つい先週、翌年度に各学校のSSRのスクーリングケアサポーターが必要な時間数の調査結果が出た。かなりのニーズがあり、今後様々な活用が見込まれる。市長がおっしゃったように、空間ができる、人がいるだけではなくて、そこに来るこどもの実態であるとか、こどもの求めるものがそれぞれ違うので、スクーリングケアサポーターを通じて各職員が共通理解のもと、その子に対して、居心地の良い空間にしていく必要がある。

●立岡教育長

非常に具体的な例だと、校長室も居場所の一つであり、あるこどもは石が好きで石がたくさんあると、一つずつを調べてくる。それを校長とそのこどもの宿題にしたりしながら段々と居場所になり、学びにつながっていくというようなこともあった。村地次長がおっしゃったように、SSRに来るこどもを見て、一番合った形を作っていく。2人目が来たらまた2人目のアイテムが増えるというような形になっていくと思っている。

●池田委員

結局、大人に余裕がないことが大きな問題のベースになっている。ゆっくり何も無い、座っている先生がいたらいいが、みんな忙しいし、この子だけというわけにいかないし、いろいろあるが、自然にそういう状況が作れるのがいいと思う。

●野口教育長職務代理者

大事なものは、誰かがマネジメントすること。一番身近なスクーリングケアサポーターにある程度学びについて任せて一緒に寄り添いながら、その子が示している様子とか、学びという環境ではどういうことをしたらいいのかを考えた時に学校のクラスだけではなくて、学校の外からも地域でリソースがあり、地域で野菜作っているので行こうという流れから理解を引き出すとか色んなことが出てくる。そのプランニングは、スクーリングケアサポーターだけではちょっと不安だと思っている。一般的に、生活指導や生徒指導を専門にする誰かがいる必ずいることに加えて、支援がいて、スクーリングケアサポーターがいると思うが、マネジメントを学校全体でどうするか。先生たちも授業を教えるだけではなくてこどもたちに寄り添いながら「何をやっているの？あ、そうかこの教科か」と会話をする。先生の力も大きいと思うのでどう配分されるか。

ハンドベルの活動では誰が来てもいいよと。多様な人たちが12～3名の中で、「僕はね、山に行ったら誰かに助けられて嬉しかったよ」と80歳のおじいさんに言われた。「運転をしても、しんどかったけど、なんとか頑張って生きています」とか自然に会話の中に出てくる。「介護の仕事があって土日は無理で参加できない」とか、「これは居場所だから」というのではなく、本当に気がついていたらケアになっている、次の年も続けていきたいとなった。

市の居場所づくりの費用が増えているが、体制として指針の中にあるように、市の中で推進体制をどのようにするか、どこがリーダーシップを取るのか、様々な取り組みの中で各課の役割は明確化しているか。

「学んでいコウカ」の八か所での取り組みは素晴らしい。最初から市がやるのではなく、自分たちがやる。月に一回、関係者会議があり、こども政策部を中心に人権推進課、学校教育課、家庭児童相談所、それから八か所の代表が必ず来て、単なる報告会ではなく、ミニ研修会をして情報交換をする。生活支援課が訪問しても、親は絶対出てこないが、何度も何度も繰り返すうちに、こどものことについては直接学校の校長先生に相談し、市の担当課を学校につなげる動きがある。今相談受けている二つの団体がある。一つはこども食堂で、学習支援をやりながら、不登校という課題が見えてきたので、学校の近くに目立たず誰でも来やすい居場所を作られた。700枚チラシを作って保護者に配った。学校は配布の協力をしたが、誰も来る人がいないので、校長先生と電話したところ、担当の先生が団体を認知して配ってないことがわかった。Wi-Fiを整えたり、先生のOBを呼ぼうとしたり、市民団体だけが頑張っていた。どこが中心になって、どういうシステム、施策が全体で見えない。

もう一つは、年配のおばあちゃんたちが頑張っている。中学生、高校生が2時間の間でもどんど

ん来たり、帰ったりしている。食事もある。毎回学校の先生、管理職、スクールカウンセラー、少年センター所長、社協も来られているのは素晴らしいと思った。こどもたちに話をしてみると、「すごく居心地いいよ」何をしているのかたずねると、見たことないようなデザインをいっぱい描いている。「ここはすごく気が楽で描けるの」。そこの代表者は事業をしていて、こどもたちにアルバイトをさせることで社会へ出る繋ぎを考えている。これからのお金の面だけではなくて、こどもの学びの保証も考えた時に学校に行って、というのは無理だが、様子を見て、ケアサポーターとかコーディネーターは必要だと思う。市民団体の様子や悩みを聞いて、こどもたちに寄り添い、どこにつなげるか、例えば教育と福祉をつなぐところが明確に見えない。そのあたりの政策を教えてください。

●岩永市長

今おっしゃったことについては、設立の経緯から課題が行政側にあり、スムーズにいかなかったこともあるので、これからどうサポートしていくかについて事務局から説明いただきたい。

●事務局

設立から一年ほど経つ居場所を先日、見学した。代表の方と話す、様々な背景のあるこどもが来る中で、背景に関わる市の関係課がどこなのか分からないとおっしゃっていた。それをつなごうとしているのが総合政策部の市民活動推進課であるが、市の職員は人事異動があるので、市民活動団体自身が中間支援を行うことが大事だと思い、取り組みを進めている。全体的な部分とこどもの居場所という特化した部分をコントロールする役割になり、定期的にミーティングをもつなどして情報共有を図ることが大事である。市民活動を応援する立場で、こうしたこどもの居場所づくりのような活動が広がっていくよう取り組んでいきたい。

●池田委員

以前に適応指導教室の名前が変わったが、その視点で話をすると、多様性を受け入れるという言葉は、様々な人が何もなく混ざっている状態だと思う。過去からある枠組みから漏れる人に対する支援、相談という概念がまだまだ根深いが、根本の考え方としてリビングルームをどうするか、誰でも居ることができるようにしようという話をしないといけないのに、「どこの部屋へ行っても良いよ」、ということではいけない。こういうことを長期的に今後組まないといけない。

●立岡教育長

先ほど、野口委員のおっしゃった学校の対応について、放課後より朝の対応が難しいことが原因になっているのではないかと感じた。朝は集団登校をしており、ルートを外れて、学校の近くの居場所を活用しに行くことがちょっと難しかったこともあるが、学校と保護者との認知の中で朝の集団登校を抜けて居場所へ行くということも生じてくるのではないと思う。学校の方も協力をありがたいと思っているので、なんとかうまく進めばと考えている。

●野口教育長職務代理者

学校の対応が問題であるという指摘ではなく、学校関係者らが居場所に来られてこどもを見つめ

てくださっていることに私は感動している。管理職も来られて、こどもの様子を見て、何とかつなげるという思いを持ってくださっている。スクールソーシャルワーカーも来られているし、すごいなと思っている。ありがとうございます。

●岩永市長

本当にこどもの居場所は、年々課題が大きくなっているが、池田委員がおっしゃっていただいた通り、そもそも社会全体、学校全体がSSR的な居場所でなければならない、という究極の目標がある。別室を設けることで、特殊な子どもたちという行政が枠組みを作ってしまうリスクもしっかり考えながら、みんなでSSRはどうあるべきなのかを含めて、考えていく必要がある。貴重なご指摘だと思うので、そういった観点も忘れずに、より良いSSRができるように教育委員会部局と連携してやっていきたい。